



アイコンタクト

自然科学研究開発機構 国立天文台
先端技術センター 准教授
早野 裕 HAYANO, Yutaka
(当協会 光応用技術研修会 講師)

11年余りの海外生活から日本に戻ったのは2015年の夏のことである。海外生活が長いと日本に馴染むのに苦労をするとよく聞くが、私もそうであった。もっとも困ったのが「アイコンタクト」だ。私の年代であれば、最近解散した有名5人組アイドルの一人のつれあいの歌を思い出すかもしれない。サッカー好きならあの日本代表監督を懐かしむかもしれない。「アイコンタクト」、目と目を合わせる、これに困るとはどういうことか。

帰国してまもないことである。通勤途中や買い物に出かけた時、私はすれ違う人の目をつい見てしまうことに気づいた。なぜ気づいたかというと、見られた相手があからさまに困惑した表情をするからだ。完全に危ないおじさんである。下手をすればストーカーと思われても仕方がない。時代が時代なら怖いお兄さんに因縁をつけられ大ごとになったかもしれない。このクセは赴任先のハワイ島で身についたものである。当地で人に会おうと、視線を交わすだけでなく笑顔で「Hi」というのが普通である。目をそらして黙ってすれちがうと、逆に敵対しているように思われるから厄介である。10年以上の習慣は恐ろしく、もはや無意識に人の目を見てしまうようになっていたことに驚いた。

無意識の所作をやめるのは難しい。もともと日本ではアイコンタクトはあまりしない。いつから私はアイコンタクトをするようになったのか思い返してみた。おそらく最初の経験は2000年にすばる望遠鏡の第一世代補償光学系の立ち上げを手伝っているときだろう。当時ボスドクだった私は、すばる望遠鏡補償光学系のチームに加わり、一年の半分くらいをハワイ島で過ごした。同じ年代にカナダ人、ドイツ人のメンバーがいて、ほぼ毎日夕食を一緒にとった。もちろん食事の最初にはご当地の瓶ビールで乾杯をする。カナダ人とドイツ人が私に質問をした。「お前はなぜ乾杯をするときビールの瓶を見るのか？」私は質問の意味がわからなかった。彼らがいうには、乾杯をするときは相手の目を見るのが礼儀である。お前は俺たちになにか不信感でもあるのか？ もちろんそんなつもりは全くなかったので、すぐに乾杯をするときは目を見るようにした。結構照れ臭い。ところが、目を合わせるだけかと思ったら、次第に目力を入れてくるようになって困った。まあ、これも信頼関係を築く一つの方法だと割り切って付き合うことにした。すると、乾杯する時だけでなく、仕事の話をする時も彼らとは目を見て話すようになった。幸いに、拙い英語で精一杯で、目を見て話す違和感はどこかにいってしまっていた。補償光学系は2000年晩秋に無事に立ち上がり、私は日本に戻った。

日本では出会った時に握手をする習慣はほとんどなく、普通はお辞儀をするから目を合わせることはない。乾杯の時はグラスを見たり、中空を見たりするだけである。しばらく、アイコンタクトとは無縁であった。さて時は流れ、2004年の4月に私はハワイ島に赴任した。今度はすばる望遠鏡の第二世代の補償光学系、レーザーガイド星補償光学の開発のためである。帰国については補償光学系の開発が終了したら相談するということだった。ようするにいつ日本に戻るかはわからない。私はレーザーガイド星を生成するシステムを担当した。レーザーガイド星は比較的新しい技術であった。すばる望遠鏡だけでなく、近隣のケック望遠鏡、ジェミニ望遠鏡もレーザーガイド星補償光学系を開発し

ていた。どこが最初にシステムを完成させるか凌ぎを削っていた。つまりそれぞれがライバルである。ところが、ライバルでありながら協力もする必要があった。レーザーを夜空に照射することを、マウナケアの全ての望遠鏡に認めてもらうためである。レーザービーム照射は光害であり、これまで全ての望遠鏡が暗い夜空のためにできる限り光を外に漏らさないよう努めてきたことに真っ向から矛盾する行為だからである。それから、レーザーを空に照射するには航空機や人工衛星の保護システムを確実なものにしなければならない。このシステムを作る上でも協力は必要だった。まず、マウナケアレーザー運用ワーキンググループを全望遠鏡の協力のもと 2005 年ごろに立ち上げた。そこでルールづくり、航空機や人工衛星保護のためのシステムの共同開発が進められることになる。ワーキンググループの利害関係は以下ようになっていた。ケック望遠鏡、ジェミニ望遠鏡はレーザーガイド星補償光学系開発ではすばる望遠鏡の競争相手だが、レーザーを照射しない望遠鏡に対しては協力して交渉・調整をしなければならない。さらに、すばる望遠鏡、ケック望遠鏡、ジェミニ望遠鏡でもレーザーを照射しない時もあり、その時はレーザービームは互いに邪魔者になる。さて、このワーキンググループで重要となるのが信頼関係、それを醸成するのに一役買うのがアイコンタクトということだった。しっかりと目を見て対話ができるか、しかもその目に意思があって、賛同、反対、中立などを言葉とともに表現しているかで、交渉や議論が噛み合うかどうかが決まってくる。2000 年の時、乾杯をきっかけに指摘されたアイコンタクトがこんなところで役に立つとは思わなかった。あの時の私の振る舞いを思い出すと、まるで別人格のようだった。身振り手振りが大きく、眉毛が大きく上下し、アイコンタクトにも臆せず、とても「日本人」の行動とはいえなかった。

現在、私は次世代の 30m 望遠鏡計画に携わり、その望遠鏡が完成した時に使う赤外線撮像分光装置の開発を進めている。この装置はカリフォルニア大学、カリフォルニア工科大学、カナダ、中国、日本の国際チームで開発していて、日本は撮像部分を担当している。まだ設計段階なので、国際的なチームで装置を製造する段階ではなく、隔週のネット会議と年に 1-2 回の face-to-face 会議で進捗報告や要求仕様やインターフェースなどの設計を進めるために必要な議論を行なっている。気がついたことは、ネット会議はアイコンタクトが難しいということである。パソコンの画面を見ながら話しをするため、視線がパソコンのカメラからそれてしまうのだ。パソコンのカメラはディスプレイの上に埋め込まれているので、ネット越しの相手は視線が少し下側に、つまり俯いて話しているように見える。従来、日本での対話はこんな感じだったかもしれないが、何かしっくりこない。不思議である。

日々の仕事やプライベートな場面ではどうか。確かに同僚の目を見て話すことは稀である。打ち合わせをするときも、対面ではなく、斜めに対峙することが多い。目をわざわざ見なくても対話が成立する。目は口ほどにものをいう、目が泳ぐ、目の色が変わる、目を背けるなど、白い目で見ると、目に関する慣用句は豊富だ。目と目を合わせるアイコンタクトは、目によるコミュニケーションの一つにすぎない。国際的な場は多様な他人との関係だから、微妙で曖昧な方法はうまくいかず、アイコンタクトという明瞭な方法しか通用しないのかもしれない。目を合わせることで自分と他者の境界をはっきりさせる、言い換えれば人と人との間に不連続面を作った方が、交渉や議論がやりやすいのだろう。その真逆がプライベートや身内ではないか。同じ空間や雰囲気共有し、自他のさかい目が曖昧になる。いちいち目を合わせているとロクなことがなく、向き合わないのが一番である。

さて、2015 年に帰国してから 4 年半がたった。私の無意識に往来の人の目を見てしまうという問題は解決したのだろうか。今でも、すれ違う人の目に私の視線が引き寄せられていくのは止められないのだが、焦点を遠くに置いてぼんやりと眺めることができるようになった。ゆるいアイコンタクトである。相手に対する圧迫感は薄れていると勝手に思っているが、根本的には何も解決していない。困ったものである。